



現代の文学=13

幸田文集



北愁
おとうと
呼ばれる
笛
籬
黒い裾
勲章
姦声

河出書房新社

現代の文学13 幸田文集

文

© 1966

責任編集

川端康成 丹羽文雄
田地文子 井上靖
松本清張 三島由紀夫

昭和 41 年 11 月 1 日 初版印刷
昭和 41 年 11 月 8 日 初版発行

定価 390円

著 者 幸 田 文
発 行 者 河 出 朋 久
印 刷 者 高 橋 武 夫
装 幀 原 弘 (N. D. C)

印刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函 貼・神崎製紙(ミラーコート)
同 納 入・東 邦 紙 業 株 式 会 社
クロース・日本クロス工業株式会社
同 納 入・株式会社小島洋紙店

発 行 所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六

電話東京(292) 大代表 3711
振替口座 東 京 10802

製本・美行製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

北　　愁	三
おとうと	一五
呼ばれる	二九
笛	三三
雛	三三
黒い裾	三四
勲　　章	三六
姦　　声	三七

年譜……………三八
解説……………三六

篠田一士………三八
插画 三谷十糸子
写真 三木 淳

幸
田
文
集

北

愁

一

檜俊介ひのきしゅんすけは五月晴れの午後をゆったりと歩いて行った。別にこれという用事があるのではなくて、ただふと思いたって訪ねてみるのである。天気はいいし、めずらしくきょうは自分にもひまがあったし、このところ弟にもかけ違ちがってしばらく会っていないしといった、のんびりしたおとずれである。

達吉たつきの家は乗物を降りてからちよつと道のりがある。上背うしへもあり格幅かくはくもいいからだに、歩くことなど何でもない。青いものが眼につく道だった。要かなめの生垣や柳の枝など、値にすれば安い植木の青さなのだけれど、町なかに住む自分の近所にはない青さである。ゆったりと歩いて行くことは快かった。もし達吉が留守でもいい、そしてたらお茶一杯飲んでひっかえすまでで、わるくない散歩だ、——と思うところを、ぐんとうしろから突かれた。

「おじさん来たの？　うちへ来たんでしょ？　こんち

は。」

突いたやつは姪いそぎのあそぎで、おそろくうしろから駈かけて来たのだろうが、どんとやって、はずみで前へ飛びだすと同時に、「おじさん」と呼びかけるはしっこさである。いつもこういうやりかたで、ちつともじつとしていない子なのだ。おちつかない子というより、動き廻りたがる子だった。自分の子たちと較べてみると、あそぎはこうしたいな、か育ちのせいか、たしかに一ト際きざはげしく活潑な子だった。動かずにはいられないような、ぴんぴんした脛すねと手と眼と口とをもっていた。

「おとうさん、うちにいるか。」

「知らない。」

「ほう？」

「だって、あそぎ今うちへ帰るとこなの。おひるに学校から帰って来て、それからずっと遊びに行ってたんだもの、おとうさんなんているかいな、わかんないじゃないの？　おじさんが行って見りゃいいのに。」

「こいつ、ひどいやつだ！　行って見りゃいいなんて！」
「はははは。そいじゃ、あそぎ——」ともう駈かけだし、
「行って見て来てあげる。」

おかっぱのうしろ頭と細い脛すねとが飛んで行った。待て、と云っても聞かず一散に行ってしまったが、俊介が達吉の門の見えるところまで行っても、見て来てあげる



十糸子

と云ったあそぎはひつかえしては来なかった。おしゃまのお茶っぴいが！と思ふのだが、達吉の古びた板塀の内側に、憚りなくあそぎの大声で泣きわめいているのが聞えた。俊介は門でなく勝手口のくぐりのほうを明けた。あそぎは対手なしに一人で、井戸のそばに突立って泣いていた。

「なんだ、どうしたんだ。おじさんを置いてきぼりにして、何を泣いてるんだ。」

「違うんだあ。う、う。置いてきぼりなんか、うううう。」

女中が台所の障子から俊介を見つけて、あわててばつが惡そうに会釈しつつ出て来た。「お嬢さんがその足でいきなりあがろうとなさるもんで、洗ってあげようとしたらおこっちゃって。」

あそぎには継母にあたるいほ子も出て来てごたごた云うのへ、俊介は笑い笑い、「わかつてるわかつてる」と障り、「あそぎ、その足洗ええー」とちと語勢が強かった。ひょっとおかつぱをゆすって、あそぎはおじへ向いた。「いやっ！きたなかない！」

草履を脱いだ片足が蹴あげられた。ほんとにきたくない足の裏だった。

「なんだ、洗ってあるじゃないか。それじゃもういい。泣かなくてもいいじゃないか。」

乾いていた涙がもう一遍、うわつと溢れてあそぎは吃る。「ま、ま、間に会わなくても、……うううう、おとうさんいるって。……あそぎ、あそぎ……」

急いで報告にひつかえすつもりだったが、間に会わなかった。足を洗えと云われてむかつとしたけれど、なるほどきたなかったから洗いもした。でもそのためにいらして泣いてしまった、——ということなのだ。

「よくわかる子なんですけれど、なかなかむずかしいんでねえ。」いほ子は誰にともなげに云った。おとなたちはなお泣いているあそぎを井戸端にのこした。

久しぶりの兄弟の雑談は、小一時間もするうちに達吉への来客で妨げられた。文章を書くことをもって業とする達吉へ来る客は、軍人あがりの海の人である俊介と同座すると、大抵きまってなにかためらいがちに、遠慮っぽく慎しむ。兄が来あわせていたからと云って、弟の宅へ弟の知人が来て遠慮するかどはないが、たがいに専門外のなりわいでは話ははずまないのであるし、用向きもまるで方角違いだと云いだし渋ると見える。いつものことでそれを察すると俊介は座を起った。いほ子のすすめる夕食もことわって、「しばらくぶりでちよいと寄席を覗いて行きたいから」などと云う。いほ子は先刻のあそぎの件を義兄がどう受取っているか、くよくよと心配らしく、「泣かせているところなんかお眼にかけてしまっ

て、私としても精いっぱいやってはいるつもりなんです、あまり効果もねえ、あがりませんで、どうもまことに残念で」と、沓脱ぎに降りている人に云いかける。

「いやあ、そりゃあもう実の子でも思うようにはならんのでなあ。そんなこまかいことを、いほさん、気にしなさんな。女はとかくこせこせしすぎる傾きがあるが、海の上へ行ってみなさい、海の上へ。いい気持ですぞ。……でもまあ、このうちはものを書く人間のうちだから、あんたの気持はよく見えてると思いますがね。それでもいつも、うまくばかりは行かんもんだから、そんなときには海の上のことでも思つて、こうひろびろとするんだな。なあに、生さぬ中なんてのは考えようによっちゃ、ちいっばけなことなんだ、くよくよせずと済むことだ。生した子は大きく育つて行つて、生さない子は育たないつていうのなら困るが、そんなもんじゃない。あそぎがちいと利かん気で、あんた、気まづけりゃおっほり出しといてごらん。そしてうちの子なんかと較べてごらん。気の優しい子にも難癖はつきたいのが、親の気持だつてことがわかるさ。」

俊介は継母子ということにはさっぱりとしていて、むしろあえて問題として取りあげないもののようであつた。母にとつても子にとつても、特別な問題として取りあげないほうがいいと思つてゐるらしかった。したがつ

て第三者も特別に考えないほうが、当人たちに対して親切な態度なのだ、としてゐるようだった。いほ子はそれもそうだと思ひ、又、そうではない、生さぬ中なのは確かなのだから、生さぬ中として特別に考えるほうが誠実なのではあるまいか、とも思う。しかし、夫の兄弟のなかでは、俊介をさっぱりとしてゐてつきあい易く思ふのだった。

帰る道に太陽は大きく沈もうとしていた。西の空は花やかだった。川沿いの道で、川は幅広く、さし潮の漫々とふくらんでいる夕がたである。水の上の夕陽が俊介を快くさせてゐる。連想が、二、三日うちに帰宅するはずの次男の上へ走つてゐる。伊豆の稲取へ調べものの旅に出してやつてゐるのである。——どうもあいつのからだは元手薄にできていて、かわいそうに、と思う。順治はその旅の目的をよく理解もしてゐたし、自分も喜んで出かけたのに、四、五日調子よく活躍してゐるらしい便りを寄こしてゐるうちに、たちまちかぜをひいて、そのかぜがまた相当手強いのをひきこんで、働くより病むほうで手間が取れるという始末なのだった。臥ていて書いた字とわかる乱れた筆蹟で、「発熱悪寒があつて思うに任せず、事務停滯しています、まもなく恢復と医師も申します。かあさん御心配なきよう」などという端書を寄こす。母親は気がでないようすが、俊介は、「もう

自分一人で病氣の始末はする年齢だ」と云う。心のなかでは、——陸の上にいるときに強く扱っておかないと、海の上に連れて行ったときかえってかわいそうな目にあわせる、からだを大事にするのはしごとの内だ、母親も妻も娘も女は男を強くすることに心がけなくてはいけない、と思う。

順治を子のなかでいちばんものになると思うものから、俊介は彼の旅さきの病氣などは心配で、かつ氣に入らないのである。だが、それも恢復して、大急ぎでしごとをして、もう二、三日中には帰宅すると云って寄こしていた。させた調査がどんな成績を挙げているかも心楽しい期待だったが、順治の帰って来る喜びも大きかった。あいつはそんなへまをしたことがない——男なのである。川の入陽が海を想わせ、海は稲取へ順治へとつながって、胸に浮かぶのである。自分の指図通りにしごとをして帰って来る息子を持つのは楽しかった。俊介は大きな夕陽に満足であった。

「帰っちゃうの、おじさん？ もっといるのかと思ったのに。」

「おお。あそぎちゃんはどこで見ているんだい。いつもどこからぽこんと飛びだして来るじゃないか。そこいらで遊んでいたのか。」

「そじゃない！ 植木屋へ行って来たの。かあさんが

ね、あしたからたいち刈りに来るように頼んで来いって。——おじさん行ってみない？ 植木屋とてもすてきよ、今がいいときだって。」

「何がいいときなんだい。」

「あらいやだ、木よ。木が粘土などみたいになってるの。」

「はてね、木が粘土とはどういうのかな。おまえはおかしなことを云うぞ。」

「だって粘土でこしらえたとおりのよ。ねえ、いっしょに行かない？」ひっぱって行こうとする手より、踏ん張っているその細い脛が、女の子らしからぬかなりな力である。無作法に伯父でもなんでも自分の好きにしようとかかるのである。自分がすてきだと思えば、それを見せれば伯父もきつと喜ぶと思いつこんでいるのである。

「おまえも女の子だなあ！」

「きまつてるじゃないの、そんなこと。それより行ってみようよ、おじさん。」

なるほど粘土細工と似ていた。櫛もつげもどうだんもきりしまも、亀や鶴の燈籠の形にねっとり刈りと刈りこまれていた。それがあそぎを惹きつけているのだった。

「どうしてこんなふうに、うまい恰好に刈れるのかしら。ねえ、おじさんも刈れる？ 梯子へ乗って刈るのよ。」植木屋も海の伯父も一緒に赤い布が使われていて、それ質素な木綿もんねりの袖口に赤い布が使われていて、それ

でやっと女の子の色彩があるというものなのだ。男の子みたいな姪である。お世辞にも優しい子とは云えなくて、きつそうな子というほかない。それが俊介に云わせれば、——なかなか、いい子じゃないか、という評価になるが、母親にはやりにくいところである。

「あそぎちゃん植木屋が好きなのか。」

「うん、大好き！ 大きな松のてっぺんへのぼって、松の葉っぱばらばらって落すの、いいなあ。」——かならず何か返辞をよこす子だと思う。順治はよく返辞をためらうことがある。

「そんなに植木屋がよければ、もう少し大きくなったとき、植木屋さんへお嫁に行くんだな。」

「お嫁？ 植木屋のお嫁？ いやだあ植木屋は——」

「なぜ。」

「だって、うちのこやし、柄杓ひょうしやくでどろどろってやらなくちゃならないもの、きたないや。」

「じゃ、どこへ行く。」

あそぎは夕陽ゆづりかを受けていきいきと血色のいい頬をして遠くの空を見ている。彼女はたった今しがた、男の子みたいだと思ったばかりのあそぎを、やはり紛うかたない女の子だと思う。十一歳だが、お嫁のことを云われれば遠く眺めていきいきとしている。

だが、あそぎはまったく違ったことを答えた。「どこ

へ行くかって、……お嫁なんかどこへ行くかわからないけれど、どっかいところへ行きたいな。遠い、いいところへ、どんどんどんどん、どんどんどんどん、……歩いて行っちゃうの、おもしろいでしょうね。水戸黄門てひと、歩いて行っちゃうんでしょ。」

俊介はあそぎの手を取って歩を返した。「あそぎちゃん忘れものをして来たらしいな、生れるときに。」

「生れるときって、何かしら。」

「……おまえが男だと、おじさんが貰って、連れて行くんだが、女だからなあ。」歩きながら伯父は浸み入るように云った。

「女だと連れて行ってくれないの？」

「うん。」

「なぜ。なぜ連れて行かないの。」

伯父はすたすた歩いて、あそぎにもう帰れと云ったが、あそぎは夕陽のなかで踊るように跳ね歩いて、渡し場まで見送ると云ってさきへ駆けぬけた。云うことを聴く子ではなかった。

渡しはいま出たばかりで、さきへ駆け行って行ったあそぎは棧橋のはじっこに、逆光線でまっ黒くしゃがんでいた。やがて立ってうろろしていると思う間に、ぴゅつと波切の石を投げる。石は一二三四と川面をかすって四段に飛んだ。「おじさんもやらない？」

「……おまえが男だと海へ連れて行って、いい漁師^{りょうし}にたてあげるんだがなあ、女じゃしょうがない。」

「どうしておじさんは、女だ女だってそんなことばかり云うの？　へんなのー！」

「うむ。」渡しが戻って来るまで伯父は、鮭とラッコの話をした。あそぎは、鮭が眼の前の川のなかにもうんと泳いでいるように思っただけで聞いていた。そのじつ、泳いでいる鮭など一度も見ただけでなかつたのだが、目高をすくう楽しさで鮭が考えられた。伯父の話は気に入ったのである。

俊介がうちへ帰ると、順治が玄関へ迎えに出た。

まだ二、三日は戻るまいと思っただけから意外で、すばやく顔つきに健康を搜る。「なぜはどうだ。それで早く帰ったのか。」

「はあ。悪いというほどじゃないけど、すっきりとしないうし、しごとにも指図していただきたいところがあつたもので……。」

「服も着かえないで、いま帰ったところか。」

「ええ、たった今。ひと足違いでした。」

「じゃあまあ休んでから、医者のところへ行つたほうがいいだろう。おれもひと風呂浴びる。……達吉のところのお茶っぴいは、まったくありや達者だね。なぜぐら

い、ひとりでになおっちゃうような丈夫な子だよ。ひっぱり廻されて、揚句の果に鮭網の話をさせられた。」順治は声を立てて笑った。「ほんとにあそぎちゃんて子は、おしゃまなんだ。対手^{あて}になつてやるとどこまでもうるさく、なぜって攻めよせて来る子なんだ。しつこいんで、いやになつちゃうけど、なんだかさっぱりとあっちへ行けども云えないような、寂しそうなところもあつて。そうかと思うと滑稽でおてんばで、……あれじゃおばさんも大変だろうと思うことあるなあ。」

順治は優しい青年だとみんなが云う。親類にいとこ・はとこは少くないけれど、順治には誰もなつく。近所の小学校へ行くくらいな小さい子供たちも順にいとこと云つて、十歳も違ふのに遊んでもらいたがるし、飼ひものもじきに馴れる。犬猫もそうだが、ものずきに猿を飼つてゐるうちがあつて、その猿が神経質でその主人以外にはあつたばかりしてゐて、ちつともかわいくない。それが順治には上機嫌で、抱いてもらいたがつたり、肩へ乗つたりするのである。人に好かれるものはけものにもいのかもしれない。「順治は父親似なのだか母親似なのだか、どっちよりもいい子だ」と云われているほど、優しく柔かい人当りなのである。父親もそれは認めてゐるのだが、ただその優しい部分が多すぎるのを、気がかりというより気に入らないのである。男には優しさもなけ

ればならないが、是非必要なのは強さだ。強くもなくて優しいのではよくない事態が生じてしまう、と云うのだ。しかし、「そんなことを云いながら、おとうさんは順にいさんの優しいのを自慢している」と弟や妹は云う。ほんとに順治は人のことを悪く云うことなどない、控えめな男だった。それがあそぎのことを、しつこいだの、あれじゃおばさんが大変だろうのと云うのは、きつといい加減で、こずらせられたことがあるのだろうと察しられた。

俊介はきょう、あそぎが金火箸かなひしのような脛を踏んばって自分を植木屋へひっぱって行ったり、井戸端で憚りもなく大声で泣きわめいていたりした姿を思う。そしてあのときいほ子に、「優しいばかりがいい子じゃない、優しいのは時にはじれったくなるし、強情も時には力になるというものだ」などと云いつつ、頭のなかには順治の姿を対照的に描いていたのに気がした。つまり順治とあそぎを較べて云っていたのだ。それまでそんな較べかたをしたことはないのに、きょうふとそんなことを思った。日ごろあきたりなくも思っていた順治の優しさと、きょう見たあそぎの、泣くのも駆けだすのもいかに押しの強さを持った振舞いとが、あの時たしかに天秤になって映ったのだ。順治にこのきつさがあったなら、どんなに後継者として頼もしいか。足りないのは強さなの

だ。それも努力や習慣で身につけて行く強さではなくて、生れつき持っている強さ、しぶといくらいな強さが順治に欠けているのは、俊介にはもの足りなかった。

——ああ、うまく行かないものだ、女の子にはなくても済むこのきつさをあそぎは持っている。そして順治にはこれがない、と思うものから、ついあそぎにつきあって、渡し場の棧橋で鮭網の話などまでしてしまつたのである。そして、いまここに旅から帰つた順治がいて、あそぎの押しの強さに閉口したらしい口吻である。おい、ぼやぼやしないであそぎをよく見ろと云いたい気が、かすかながらあるのだ。——あいつが男だったら、おまえにつけてやって海へ出すんだ、あいつのきつさがおまえの足しになるんだ、とそんな気がしているのだ。た。

夕食のまえに順治は薬瓶を持って帰って来た。なぜはもうなおっているし、どこも何ともないが過労だから、休息するようにとのことだった。それが父親には不服である。

「よたつばちなからだだなあ。ちっと動くとすぐそう。だ。そういう人間は好きなことをさせておくと、いくらでも平気で続くくせに、少し我慢のいることだとじきにまいるんだ。おまえは第一が、気にもからだにも強さがたりないのが欠点だぞ。」

「そんなことおっしゃっても、順治がなにもなまけや勝手気儘でかぜひいたんじゃあるまいし。それに弱い弱いつて、さもないも病氣しているみたいですね。」

「それだからいけないんだ。なまけ病氣だとは云わん、いまの若さにすぐかぜだ過労だと云うようじゃ、いつ働くときがあるんだ。頭も元手だがからだも元手だと、なぜ思わないんだ。あそぎなんてやつは、女の子だというのに不器量で損をしているけれど、丈夫だもんだからきびきびと馬力をあげておとなに立対^{たてあひ}って来る。どうもうちの子たちは少しぐずだ。」

「へえ？ あそぎちゃん^{あそぎちゃん}の肩を持つ人はないと思つてたけど、……あれがいいんですか。丈夫ならあれでもいいんですかねえ。あたしは蔭ながら、いほさんはさぞやりにくかろうと、いほさんのほうへ肩持ってますがねえ。」

こんな気まずさのせいでもないが、順治の旅の報告はあまり父親の満足するものではなかった。稲取という漁村の地理人情、漁獲状態、海草の生産、魚棚、潮流、そういう一連の実地調査なのだったが、そういう調べにも人からは出ていた。順治らしくきちんとしていて、ひどい手落ちなどない。人の氣質や、商取引のいまも行われている古い習慣に向ける觀察には、相当に辛辣^{しんせつ}な眼も利かせてあるのだが、俊介の経験から云うとこれではま

だまだ甘い、土地の人の云うことを根拠にすぎている、もっとえぐつてかからなくてはいけない、鋭^ささが足りない、それに小さな纏^{まと}りであることも気に入らなかった。一步一步あるいて調べるのは丹念でいいが、それだけでは狭くていけない。高い所から一望に見るという、広い眼の幅が必要である。料簡の狭い觀察ぶりでは、大きくしごとをするわけには行かない。躍動とか活気とかいう、いわば意氣のあがるもののない調査だ、と云う。つましいのは失敗が少くいいが、大まかに伸びのなのは、魚を追うなどというしごとには適当でない、と説くのである。父は子の性格の手堅さにおもしろくなく、子は父の大きさに困惑するのである。

二

順治は翌日一日をあいに置いて、叔父の達吉のところへ遊びに行った。一日あいを置くところが順治の性質をよく語っていた。

稲取村の漁業調査があまり父親に満足を与えなかったからである。自分としてはできるかぎりのことはしてきただつものである。しかも悪性感冒にかかったりして状況のよくないまま、それでもしごととは誠実にし了^おせたのである。けれども、父親が不満足に思つて指摘することもよく諒解できるのである。もっともだと思ふ。自分のし